

# 人への賛歌 発声と舞踏

板東 浩

私が大好きな渋谷の *Bunkamura* は、文化のメッカ。このたび世界に先駆け、ピアノの生演奏とダンスとのコラボレーションを観た。演じるグループは「カンパニー マリー・シュイナール」。主宰するマリー・シュイナール女史はダンサー・振付家で、長年にわたる芸術への貢献に対して数々の賞を授与されているほどだ。今回の試みは「シヨパンによる二十四の前奏曲」と「コラール〜讃歌〜」である。

ピアノの鍵盤には十二の音があり、各キーに長調と短調がある。従って、調性は二十四種となり、シヨパンは二十四の前奏曲と二十四の練習曲集を作曲した。各曲はバラエティに富み魅力的。微妙な情感や心情の変化が、シヨパンの繊細な感性で表現されているからである。

舞台の左端に置かれたグランドピアノが、プレリユードを奏ではじめた。第一番はハ長調で明るい雰囲気。季節でいえば、冬が去り春が訪れたときの雰囲気と香りだ。色なら黄色から黄緑色。その伸びやかな気持ちを一人的ダンサーが表現し、リズムカルに踊る。

第二番はイ短調で、一番と対照的。テンポは遅く、旋律は半音階的に下降してくる。灰色の曲調を感じ、シヨパン家の病歴を思い出した。当時、不治の肺感染症で、妹は十四歳で亡くなり、シヨパン自身も一生涯苦しむことに。本曲には、落胆や焦燥感が見えかくれする。男女二人のダンスから、気持ちの行き違いや苛立ちが醸し出されていた。

三番がおもしろい。#一つのト長調。この調性では、しばしば緑色や青色が感じられる。左手は十六分音符の速いアルペジオが続く。振付けが独創的で、十人が戯れながら、サッカーボールがあちらへ行ったり、こちらへ来たりというものだ。

このような心憎いウイットに触れ、芸術の香りを堪能した。#が一↓六個、bが六↓一個の曲が順に並び、最終はb一つの二短調。低音がグワーンと響き、全体を包み込む。あたかも、人間の根源的な叫びを表すかのような曲想に、黒いタイツを纏った半裸の男女ダンサー十人が生命の力強さを表現するかのようだ。

その意図が、第二部にも引き継がれていた。「コラール〜讃歌〜」では、ダンスに加え、唸る、叫ぶ、喋るといふ動作も合わせて使う。人間の素晴らしさを考える際には、ほ乳類からヒトへの進化、発声や言語、そして芸術や文化の起源などを避けて通れない。

それでは、発声について、猿とヒトとを比較し考えてみたい。チンパンジーはキヤーとかキーとは声を発するが、細やかな発音はできない。一方、ヒトは複雑な発音が可能だ。これはなぜだろうか。一因として、咽頭（のどの奥）と喉頭（声帯付近）の解剖学が関わっている。猿では両者間の距離が短く共鳴空間が狭いので、発音が難しい。しかしこの場合、飲食をしながら呼吸するという芸当ができる。ヒト以外の哺乳類と、ヒトでも新生児や乳児ではお乳を飲みながら息ができるのだ。乳児が十カ月を超えると、次第に喉頭の位置が下がりが共鳴空間が拡がり、単なる発声から発語が可能となる。このように、ヒトが誕生した後も、動物の進化の道筋を辿っており、自然の摂理に驚かされてしまう。

なお、choreography（舞踏術、振りつけ法）とは chorus（コーラス）、choir（合唱団）、choral（合唱の）、chorale（コラール、賛歌）など同じ語源の言葉である。今回の舞台を見ながら、ヒトの進化と歴史の関連に気づいた。そして、根源的な本能が内在する脳の奥深くから、素晴らしい存在である人に対する賛歌が沸き上がってくるように感じた。音と音楽、言葉とコミュニケーション、動作と運動などについて探究するのが、私は大好きだ。一見、全く別と思われる現象が、実は密接に関連しており、偶然ではなく必然により、原因と結果の結び付きが存在しているのかもしれない。

（徳島大学生体情報内科学）